

911.5
八

俳諧論

よし
ふろ

よみしも家おちをりともいふいふてすふたん
やぶのよむより一勝乃風園とう一れを
是中く忍の海をト一をまじりて八和家内色
との毒のよ系雅なればる利能因法所をがて
長徳と作せしとて後紙おまへすうい
新しとすは次して中一ものも能可成よ

供り春若せんをれ福船よすあがるはゆ
か云佐田池の船人のよ海のをてむりハ下船の人
をいば乃雅なる紙嘆せれしはわかたり
ぞろし今の世の人よ一まんをねむるをれと云
系ふりしむりの海をト一俗成すと雅ふは
せおち了えなし。あつ家ふぶらすべし乃
代くたぐく松の系あのちりしせどしていまの
まぐえつと一うけれすまを海りて

りあはくも何とぞ兼好もその母のおうまに
おとさなげにたぐふわしおさなげに成るべ
はくゆふが氣にものゆき行くにふみしを
よのきつらひせむべし中をわづらひてしり
深れ母のまじひ人のあらでえおはみちをたて
まねび徳もむらう六ねむらぬよのこえはり
おとさなげにたぐふわしおさなげに成るべ
ふくまの母のまじひのあらでえおはみちをたて

めとされはむとくの御命ともふその世の上の
いしえおはるるも風流雅情や海をよる
ふくまの母のまじひのあらでえおはみちをたて
あのみちとぞわづらひてしり中をわづらひてしり
て後の諸御を成解せしものあらでえおはみちをたて
を解せしものあらでえおはみちをたて
とぞわづらひてしり中をわづらひてしり
ふくまの母のまじひのあらでえおはみちをたて

人帯に河にて 新奇思ふけり。ほのか一辨の
俗個すしきどおまを俳借ふふ名と古今集
の俳借奇よりりもやまてそのよゆま奇淡く
ドなり風吟さあめくいやんく。まゝ余卑理
よゝゝど貞徳芭蕉その字つとる。其角
奇もまどい子まのその風とまるびて世
心法さるぬふ今ふりてハ教部ふそり
幸ふ治素生と文物のさんたるにめいてい

かへは好むのよゆまのそとるのあやけ
け中まのめた人のそまをまばうりるあやけ
らん。あの日芭蕉の襟はどくは状記かんてふ
まの成りもあまふ。何れも子と病呻吟かして。
風流とつまんハちまがゆ。もまりほめね。其人
素穀食乃庸人ね。其襟の風をらんす。只
昔秋の遠比ふ感。折ふゆと時ふのまゆ。
心法さるぬふ今ふりてハ教部ふそり。遊遊おけり

何り中古の私考とて、故より亦あべん今も
古今集此俳諧奇とめけて云ハ

枕より跡より意の世々申せせんかぞを麻中ふとる

茶後りりこのせあさくく〜此種とあり

歌成り人となりぬむいあつがなまふ今我とたぬ

風吟雅はよりてが〜あり

魚の中はうはびとあまをば深き谷をこ流かりあ

俳諧の名是をがが〜知り〜吟深き〜
性情

の法はのうらまのうらまは〜

かれを定らんとせがなは〜
庄種氏をびや

鬼神をかんぜ〜しりふ〜孔子の語をけつと

のあふ〜えん海の形を〜とありあ雅を〜と

う候すそまふをりあるゆふ俳諧乃意の情紙

ワヤのむ〜し〜あふ〜れ〜あり。ひの

情をあはれのと〜と〜のふれ〜ありあ〜

く都陋の〜ば〜あ〜と〜徳ふ〜い〜と〜バ

滅のついでにゆびをばやぶとくさんすれ
たのびく連奇ふちがとてたふ乃家たやま
とくごまの庭しだましくま

筆あてのまや焼やてすの君まれ故かきり那な 芳樹尾

なんどやる神ふなりとせゆくちち世とんふ

諧あの心せ風ふう神かみとくまふえれ。宣のう境さかい成なりとんふ

そふぬふふとくくあ病びやう神かみ吟ぎんふたりとてそのまふ

おまど商人あしやう乃のしに夜よとるこいふわしり

うぬひを俳はい偈ぎの流ながたれとてふべと

凜りん然ぜんあして宣のう境さかいはりしむらとくまふ

うぬとあふとすくくくくくくくくくくくく

ねふとんや和わ分ぶんを俳はい偈ぎなとほら宣のう境さかいとんふ俳

諧あ俗ふく俚りりりとく宣のう境さかいはりふとくゆふ木の俳

の柳やなぎし柳やなぎをういこのふはくくふをふ

劉りゅう葉はとくをきくとの自じ然ぜんふかゆふ世よ上のう乃

おふお子こけけとく味あじ。真まふま葉はとく宣のう境さかいはりふ

たかへし〜

此名ハ割羅本力の〜

俳諧連奇辨

若竹やヨウチク此の〜

下〜シタは〜

い〜イ〜

改懐カクワイ〜

舞マユ月ツキや六日ムロヒ〜

花ハナの〜

馬ウマ〜

春ハル柳ヤナギの〜

雲クモ〜

花ハナ〜

花ハナ〜

花ハナ〜

麦林

麦林

麦林

麦林

麦林

麦林

麦林

麦林

麦林

麦林

麦林

麦林

とあびくくさし心三折ふさけし合科玉條を

れが海くくさるんをうし海舟さく又之原

此名ハ割羅木刀のそりりもあらん

俳諧連奇辨

若竹や若此ありのさすぶさむと 麦林

まじら波舟ふのふしと晴ふり 麦林

いあすもさあひさし月さすけけり 麦林

蚊懐かゝ志まきくちりし夢 麦林

如月や六日と常此あすを似ん

かりし路し若ふやるらんを此雨

まのうぬるうりまじいとき想成

馬さぬま牛ま夕日の水あられ

若柳の望あひ乃松や三日の舟

雲おくり人紙体りり月えんう角

いながり此裾をぬすや水のふ

花さうぬ身まきりいし紀柳くれ

合科玉條を

又之原

合科玉條を

あまのこゝろくしこゝろかり花のよしむ

貞室

あまのこゝろのよふまゝ花乃まじりゆ

漢人茹

ゆく秋のたぐくはるもいふ

麦林

蝶のふれをかり楚中此の落

て世茂

朝づくやささげはるふく

漢人茹

むけしと角よりたせ蝸牛

漢人茹

唐崎やよる此るなりむりの名

漢人茹

うごのその北風をぞとらむ

麦林

麻の葉のよふふく

麦林

あまのこゝろくしこゝろかり花のよしむ

漢人茹

あまのこゝろくしこゝろかり花のよしむ

漢人茹

あまのこゝろくしこゝろかり花のよしむ

漢人茹

あまのこゝろくしこゝろかり花のよしむ

麦林

あまのこゝろくしこゝろかり花のよしむ

漢人茹

あまのこゝろくしこゝろかり花のよしむ

麦林

あまのこゝろくしこゝろかり花のよしむ

加賀
子夜

あつらぬわふいしうしやんしうし

漢人

あつらぬくふし葉そのおのるハ形もが

芭蕉

経致の葉んふしゆくながる

漢人

しりあひふちねるもわー秋のふ

漢人

花のしり葉の乳母のふしー非

其用

はたはく風流をさるんーあつたて風洞り

おしはくーこれかまは秋よりしり葉をさるん

しりあひふちねるもわー秋のふ

七ふのま奇振ゆくとまははのんしり

しりあひふちねるもわー秋のふ

しりあひふちねるもわー秋のふ

しりあひふちねるもわー秋のふ

しりあひふちねるもわー秋のふ

しりあひふちねるもわー秋のふ

しりあひふちねるもわー秋のふ

しりあひふちねるもわー秋のふ

らばしそ入まきり 旋返りし まんがとくす

もなんど風洞のぬふ入ん 和歌のふりしり 和歌

ふらんそと 其角がみえ集み

川むらひそが玉浦へりゆきまは

そとまきり 渡す 情の赤きおぼしき けねもまは

此都池と 捨酒と志ぬ 市井の俗に守る人なり

るに風流とちがらん じよはたし 唯あり眼乃

月そのまきりしよと 月鳴るとはすまはし

と 真のまきりしよと 向きまきりしよのむ

と 郷俗の流るるより 入るふすまきりしよ

真の俳諧

野の枯くまきりしよの元も月おく 漢人志

せいとまきりしよのむか 水車 桂琳

まげ山ハ秋のまきりしよのむか 漢人志

あふいしよをぬまに候むら の物 漢人志

うへ下まきりしよのむか 漢人志

志より尾北を削し不嵩廟の那

漢念

ちりぐらうい風とそものうん芥みほ

其角

ゆく末を注ぐとるぬまんあふのむ

く畏

香葉散大が秘ぢりてく北山平

其角

卯北を解ふつとすむ百に野藤式

漢念

ふざりうか禿もりくくりにて

漢念

うーし流うし種を河びきるを念式

漢念

草是成也いりーはまみぢ端分たり

宗因

月平より孩しては上ふたより那

漢念

種はさのしーしりるさーしどしれ

漢念

おとふしつとどたわん猫乃念

漢念

玉物もさ令あう種うりらせせい

漢念

なごき系俳諧と歌人志の風潮をりくあふり

漢念

屋すく又けんくふすぐまう奇えらんこぶす

漢念

志より系俳諧の那

漢念

俳諧の那

三斗てうーう河ゆみや秋乃るま

漢人如

名月や池とあづりてよもいとく

芭蕉

うむずあろ離うーぼくぞめ道し

嵐名

舟は撥く馬をさしむ事し郭云

芭蕉

うせは縁ひきこもまは次人の終

たせを

枯枝よ鳥のうゆりり秋のくれ

たせを

三并るのつとまうぞやふの月

たせを

つ救う一爰吟と嘔囉す悪むまはねん

庭北有樹ときがゆくと五心あ

其角

ゆ紀の日や船にどの魚のつゆ

其角

浮秘花ふまみ波すせて梅をか

其角

夜入やまゆの小強くなはつこれ

其角

がまもむうのう安語ふあすや

松原の千しにありとらんするまきま

漢人如

いろがすかかぢらハなひをを自お船

漢人如

山里は可嵐かそー梅乃て那

たせを

いよさらや法華うけむい河みぎ堂

其角

上子河と名も優美なり角カと

其角

婦の比や蛙とびいむ水のたぎ

とせ成

世の紋妙なりとて世の人をも俳諧志流も

嘆羨す。亦ふよわ海ふとらるるり。まゝ秋の文

海を古今凡流雅士乃就景介して吟詠を

度し。云候ふふ河り。びやまびく深るる

閑居此静とらるる。意味云ふ河りなんど

ねむふとれとむむとふとむつめて恒年の

鄙云なれば法美ふとむむたり。凡雅の感誦と

おりのとふ海ふ海記の志して松むを

らんやまあゝなり

かしむに人たて淋し地柱と那

はぐめふすところのふと私の俳諧ふおその屏

月が早きなり

海を海ふとらるるをたかくらるるを

又白雲とてやまのこころをのびのびと流るるを
蓮の葉ふとんでいつらりて

風洞とてまごころの向白一箇の隣り

何んぞ裁断せば大抵くはとて又三折乃

弁おせりてわらわげて一風を判へたふとす

暮方の墓所の世帯にツ時分 漢人嘉

かんむりておもひにうとんでり 麦林

糸がくまに六日月やがて候 漢人嘉

夏州や兵じりかゆたなり 漢人嘉

ゆたの日やゆたも人のまはかりの 其角

しりして格の速ちりしもの 其角

しり子の泣くはむむとて 漢人嘉

は風洞とてまごころの向白一箇の隣り

そとて信のまをさくふ志げく松のまのちり

うせぬて深のまのちりのねむりて 漢人嘉

万化のまをさくふ志げく松のまのちり

柳花散らしくさくさ木立をすそを風洞
も言語も雅俗と云ふふすしつひに成て微す
下。ふれど赤草ふるんせし淡ゆふしつゝ
ぐらふ柳花よりぞて空境と風流に成りてん
る。杞柳乃ともとのぞくつたのつたなれば。

いさくくしつゝいさくくしつゝも幸何ゆかたうん。
三杯の酒は既味せば空境もすし不用をふ
出くかのつらう海んりの。

右小論ど致かすくは佳句なりして其の身自ふ
やうなり成り月あぬまのつふ游泳してさく水
わじすもさありもあらん。查の人菽麦成りてま
えどして虚皇も成りしつゝあのも中がまのま
ふりりかつてかりふ今の附合といふまの。是其の

よりして其以廢せむ 然るに 理学をばずんバクンぞ
卓識の 聖賢と長ぜんらふは只一とんとつて同志
ふ志ありともあつそひともや先く人か志ゆふ所は

唯 諧 論 終

寶曆丙子中秋下浣



日本橋南通三丁目

吉文字屋次郎兵衛

書肆

神田鍛冶町二丁目

池田屋傳兵衛

